

1 曲目

悲しんでいる人たちは、さいわいである、
彼らは慰められるであろう。

(新約聖書 マタイによる福音書 第5章4節)

この聖句は、イエスの「山上の垂訓」(山上の教え)の冒頭の一節になります。「山上の垂訓」とは文字通り、イエスが山に登って、説いた説教です。

ここの「さいわいである」という言葉は、「幸せである」より、もう少し宗教的なニュアンスを加えて考えた方がいいでしょう。「神に祝福された幸せ」という感じです。「祝福する」とは「祝福する対象(もの・人)の上に手を置いて、これは神に属するものとして肯定すること」という意味だと、教会では習いました。

ここでイエスが「幸いである」と祝福したのは、「悲しんでいる人」のほかには、「こころの貧しい人」「柔和な人」「義に飢えかわいている人」「あわれみ深い人」「心の清い人」「平和をつくりだす人」「義のために迫害されてきた人」の計8人です。注目すべきは、「こころの貧しい人」「悲しんでいる人」「義に飢え乾いている人」といった本来幸せから遠そうな人に対して祝福を述べている点です。このような人たちこそ、神の慰めがある、祝福された人なのだ、とイエスは言います。

涙をもって種まく者は、
喜びの声をもって刈り取る。
種を携え、涙を流して出て行く者は
束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう。

(旧約聖書 詩篇 第126篇5~6節.)

これは、悲しい状態にある人も、いつかは大きな喜び得ることができる、ということ象徴的に歌った詩です。

聖書では、労働は「つらいこと」として表現されることが多く、「種をまく」ということは「涙」をともなうような大変なこと、として認識されます。そして「刈りとり」には「喜びの収穫」という意味が含まれます。

2 曲目

人はみな草のごとく、
その栄華はみな草の花に似ている。
草は枯れ、
花は散る。

(新約聖書 ペテロの第一の手紙 第1章 24節)

ここは次の次のパラグラフ「しかし主の言葉は、とこしえに残る」までで、一続きの聖句です。草や花が散るように人は儂いものだ、ということを読み、その次に、その儂さとは対照的な、神の永遠性、確かさをうたっています。

(人の儂さ、というのは、日本でも「諸行無常」といった考えがあるので、分かりやすいかと思います)。

「人はみな草のごとく～」という聖句は新約聖書の「ペテロの手紙」の一節ですが、実はペテロも旧約聖書のイザヤ書から引用しています(だから聖書には括弧つきで記されています)。こちらとあわせて読むと、より分かりやすいと思うので、参考のために下に記しておきます。

「人はみな草だ。

その麗しさはすべて野の花のようだ。

主の息がその上に吹けば

草は枯れ花はしぼむ。

たしかに人は草だ。

草は枯れ、花はしぼむ

しかし、われわれの神の言葉は

とこしえに変わることはない」(イザヤ書 第40章 6～8節)

だから兄弟たちよ。主の来臨の時まで耐え忍びなさい。見よ、農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後(のち)の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている。

(新約聖書 ヤコブの手紙 第5章 7節 364p.)

この聖句が所収されている「ヤコブの手紙」は、ヤコブが逆境の中にある信徒に宛てて書いた手紙です。ここは、ヤコブが、逆境の中にある信徒らに、今はつらくても、救われる日が必ず来るから、それまで耐えなさい、と励ましている言葉だと思われます。

「来臨」というのは、俗に言う「最後の審判」のことです。キリスト教では、十字架に架けられた後、復活し昇天したイエスは、いつかまた降臨する、と考えられています。それが、「最後の審判」で、そのときに信者であれば、必ず救われ、永遠の命を得る、と信じられているわけです。

ただし、ブラムスが、自由に聖句を撚り合わせて作っていることを考えると、この聖句の「だから兄弟たちよ、耐え忍びなさい」という部分は、「草のように枯れる、はかない人間だからこそ、主が来臨し救われるまで耐えなさい」という意味に捉えた方がいいと思います。

ちなみに「農夫は～」以下は、神の救いがあるまで耐えて待つ、ということの喩えです。「地の尊い実り」とは「収穫」のことで、「前の雨と後の雨」とは、シリア・パレスチナ地方で春と秋、収穫に前後して降る恵みの雨のことで、ここでは、神の救い、恵みの象徴として語られています。

しかし主の言葉は、とこしえに残る。

(新約聖書 ペテロの第一の手紙 第1章 25節)

主の言葉は永遠に残る、という聖句は、キリスト教においては、大きな歓喜とともに語られます。

なぜなら、聖書に出てくる「言葉」とは、ただの「言葉」ではなく、「神の契約」「神の教え」といった意味を含んでいるからです。(例えばヨハネによる福音書は「はじめに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった」という象徴的な言葉から始まっています。)

神の契約とは、神が人間に交わした「私はあなたを必ず救う」という約束です。その神の契約に関しては、さまざまな箇所では記されていますが、例えばイザヤ書には下記のような聖句があります。

「ヤコブの家よ

イスラエルに残ったすべての者よ

生まれでた時から、わたしに負われ

胎を出たときから、わたしに持ち運ばれた者よ

わたしに聞け。

わたしはあなたがたの年老いるまで変わらず

白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。

わたしは造ったゆえ、必ず負い、

持ち運び、かつ救う」

..... (イザヤ書 第46章 3~4節)

「山は移り、丘は動いても、
わがいつくしみはあなたから移ることなく、
平安を与えるわが契約は動くことがない」……（イザヤ書 第54章10節）

キリスト教においては、人間とは、生まれながらにして罪深い（原罪）、弱く儂い存在だ、だから神の救いが必要なのだ、という大前提があります。それを認識していないと、「草のように枯れないように、主の来臨を待ち望みなさい」といった誤解（どこかのパンフで読みました）が生まれてしまうのだと思います。

主にあがなわれた者は帰ってきて
その頭に、とこしえの喜びをいただき
歌うたいつつ、シオンに来る。
彼らは楽しみと喜びとを得（え）
悲しみと嘆きとは逃げ去る。 （旧約聖書 イザヤ書 第35章10節）

ここでは、その救われた者たちが、よろこび、歌いながら、シオンに凱旋するシーンが預言されています。シオンとは、「神が住む丘」という意味の言葉でしたが、転じて「聖地エルサレム」を指すようになりました。しかし、ここは、もともとの「神の住む丘」の方が、意味が通りやすいと思います。

3 曲目

「主よ、わが終りと
わが日の数のどれほどであるかを私に知らせ、
わが命のいかにはかないかを知らせてください。
見よ、あなたは私の日をつかのまとされました。
わたしの一生はあなたの前では無にひとしいのです。
まことに、すべての人はその盛んな時でも
息にすぎません。
まことに人は影のように、さまよいます。
まことに彼らはむなしい事のために
騒ぎまわるのです。
彼は積みたくわえるけれども、
誰がそれを収めるかを知りません。
主よ、今わたしは何を待ち望みましょう。
わたしの望みはあなたにあります。 （旧約聖書 詩篇 第39篇4~7節）

ここでは、「人の世は非常に儂く、虚しい。それゆえに、私たちはあなた（神）に頼るしかない」というようなことを歌っています。今が虚しいぶん、神への希求がより切実なものになるわけです。

神に従う人の魂は神の手で守られ
もはやいかなる責め苦を受けることはない。

旧約続編 ソロモンの知恵 第3章1節

神に寄り頼むものは、必ず神が守る、という神の約束が、ここでもまた繰り返されています。

4 曲目

万軍の主よ、
あなたのすまいはいかに麗しいことでしょう。
わが魂は絶えいるばかりに主の大庭を慕い、
わが心とわが身は生ける神に向かって喜び歌います。
あなたの家に住み
常にあなたをほめたたえる人はさいわいです。

(旧約聖書 詩篇 第84篇1, 2, 4節)

これは「主の住まい」(=天国)を讃える賛歌です。聖書で「主の住まい」は、常に憧れの対象として記されます。

この世に生きている「わたし」は、天国の麗しさ想像し、そして、そこに住み、神のことを賛美する人(つまり既に亡くなって天国に居る人)は、なんて幸せなのでしょう、と歌います。

5 曲目

このように、あなたがたにも今は不安がある。しかし、わたしは再びあなたがたと会うであろう。そして、あなたがたの心は喜びに満たされるであろう。その喜びをあなたがたから取り去る者はいない。

(新約聖書 ヨハネによる福音書 第16章22節)

この聖句は、イエスが捕えられる直前のシーンで、イエスが弟子たちに言った言葉です。この聖句の少し前に以下のような聖句があります。

「わたしは、わたしをつかわされた方（神）のところに行こうとしている」（同福音書 16章5節）

「もうあなた方はわたしを見なくなる。しかしまたしばらくすれば、わたしに会えるだろう」（16章16節）

イエスが弟子たちにそのように告げると、彼らは不安になり、口々に論じ合います。そこで、イエスがもう一度、告げたのが、上記の「このようにあなたがたにも今は不安がある～」以下の聖句です。

ここでイエスは「私が死ぬということでは不安があるだろう。しかし再びわたしたちは会うことができる、そして、そのときは、あなたがたは喜びで満たされる」と弟子たちに約束し「その喜びは永遠に続くものである」ということを保障しています。

これは弟子たちに語られた言葉ですが、信者は聖書を読むとき、そのまま、自分たちへのメッセージとして受け取ります。そのときに、この聖句は、「死」があろうとも、いつかかならず再会できる、その喜びは永遠である、というように少し拡大解釈されることもあります。ブラムスもそのように、受け止めて、この聖句を引用しているのかもしれない。

目を開いて見よ。わずかな努力で
私が多くのおん安らぎを見出したことを。

（旧約続編 ベンシラの知恵 第51章 27節）

ベンシラは、若いころから知恵を求めた賢者です。神の耳を傾けるだけで知恵を得、多くの教訓を見出した人です。上記の聖句はそのベンシラという言葉です。

分かりやすく言えば、「神に従い、神の言葉に耳を傾けるならば、わずかな努力で、多くの安らぎを得ることができる」ということを「しっかり認識しなさい」と言っているのだと思います。

母のその子を慰めるように、
わたしもあなたがたを慰める。

（旧約聖書 イザヤ書 第66章 13節）

言葉のとおり解釈すればいいと思います。この「わたし」とは神のことです。

6 曲目

この地上には、永遠の都はない。きたらんとする都こそ、わたしたちの求めているものである。
（新約聖書 ヘブル人への手紙 第13章 14節）

「地上」とは、現実の世界のことです。「永遠の都」とは、永遠に続く都という意味で、「きたらんとする都」とは、最後の審判によってもたらされる「神の国」ということとなります。

つまり分かりやすく言うと「この世界に永遠に続くような都はなく、いつかもたらされる神の国こそ、わたしたちの求めているものである」という意味になるかと思います。

ちなみにこの聖句の少し前に、「地上では旅人であり、寄留者である～」(ヘブル人への手紙 第11章13節)という聖句もあります。キリスト教では、人が現実の世界で住んでいるところは、仮の住まいであり、本当のすみかは神の国にある、という認識があるようです。

ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたち、すべては眠り続けるのではない。終わりのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらせられ、わたしたちは変えられるのである。(そのとき)聖書に書いてある言葉が成就するのである。

「死は勝利にのまれてしまった。

死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。

死よ、おまえのとげはどこにあるのか」

(コリント人への第一の手紙 第15章51,52,54節 276p.)

この聖句の前に、「血と肉でできた私たちの体は、必ず朽ちるものだ」というような意味の聖句があります。それを受けて「ここで、あなたがたに奥義を告げよう」という聖句が続くわけです。

その後の聖句は、言葉を補いながら読まないと分かりにくいかもしれません。分かりやすく書くと、次のようになります。

「私たちは(死んだのちも)眠り続けるわけではない。終わりの(この世の終わり=最後の審判)のラッパ(聖書においては神の命令を告げる楽器)の音と共に、一瞬にして変えられる」、どのように変えられるかという、「ラッパが響いて(=神が命令すると)すでに死んだ人は朽ちないものに甦られされ、(いま生きている)私たちも(新しい体に)変えられるのである」

(そのとき)は、ブラムスの言葉です(だから括弧つきで書きました)。聖書では、本当はそのシーンをもう一度説明しているのですが、ブラムスは「そのとき」というように、まとめています。

「聖書に書いてある言葉が成就する」というのを読んで、「聖書に書いてある言葉? これも聖書じゃん」と思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、これを書いた人(パウロ)が生きていた時代、「聖書」といえば「旧約聖書」のことでした。「新約聖書」は

まだ出来ていません。(この聖句が所収されている「コリント人への手紙」は新約聖書です)

ここで言う「聖書の言葉」とは、その後に続く「死は勝利にのまれてしまった。死よ～」を指します。これは旧約聖書のイザヤ書、ホセア書からの引用になります。

「死は勝利にのまれてしまった～」は言葉のとおりによめばいいのだと思います。「神によって新しい体によみがえさせられた私たちにとって、死など恐れるに足りないものだ」という、勝利の賛歌です。

「われらの主なる神よ、
あなたこそは、
栄光とほまれと力とを受けるにふさわしいかた。
あなたは万物を造られました。
御旨によって、万物は存在し、
また造られたのであります」

(ヨハネの黙示録 第4章11節)

これは文字とおりに解釈すればいいのだと思います。万物の創造主である神をほめたたえる賛歌です。前後の文脈から言えば、最後の審判で、よみがえった人々が神を賛美して歌っている歌です。

「御旨」という言葉は、あまり日常的には使われない言葉ですが、キリスト教関係ではよく使われます。神の「お考え」ということです。よくお祈りの最後に「(勝手なお願いをたくさんしましたが)すべて御旨のままになさってください」というような言葉をつけます。

7 曲目

「今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである」。御霊も言う、「しかり、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく」

(ヨハネの黙示録 第14章13節)

この「今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである」という言葉は、預言者が聞いた天からの言葉とされています。「主にあって死ぬ」というのは、「主を信じて死ぬ」、もっと言えば「信仰ゆえに死ぬ」ということです。

「死ぬ死人」というのは、分かりにくいのですが、現世での命を終えた人(死んだ人)が最後の審判で最終的に運命を決定される、ことを言っているのだと思います。しかし、これは随分丁寧な訳で、新共同訳聖書だと「死ぬ人」になっているので、あまり深く考

えなくていいと思います。

「御霊」とは、聖霊のことを指します。

「わざは彼についていく」とは、最後の審判を受けるときに、生前の行いが審判の材料として有効で(=ついていく) その行いのよさゆえに救われる、という意味なのですが、分かりにくいので、新共同訳聖書では「わざが報われる」と訳しています。私もその解釈でいいと思います。

黙示録は「最後の審判」について書かれた書物なので、聖書の解釈では上記のようにややこしいこととなりますが、ブラームスの抜粋の仕方から考えると、「今からのち、主を信じて死ぬ人はさいわいである」。御霊も言う「そうだ、彼らはその(生前の)労苦を解かれ、その行いゆえに救われる」程度に考えた方がいいかと思います。